図書館だより

市立図書館

小さなときから　本はともだち

図書館ではおはなし会を開催し、子どもたちに楽しみながら色々な本と出合う機会をつくり、本と親しむお手伝いをしています。

香北分館では、小学生だけでなく、就園前の乳幼児を対象にしたおはなし会を定期的に行っています。

◆どんぐりの会

3歳ごろまでのお子さんを対象にしたおはなし会です。子どもと一緒に遊ぶ手遊びの紹介も行います。お気軽にご参加ください。

詳しくは、市立図書館、子育てセンターぴらふ・なかよし、市乳幼児健診でチラシを配布しています。

【日時】11月5日（月）1月21日（月）10時30分～11時
【場所】子育てセンターぴらふ（美良布保育園）
【問い合わせ先】香北分館☎59・4550
子育てセンターぴらふ☎59・3121

〔どんぐりの会からのおすすめの絵本〕

▽たべもの　だーれ？（よねづゆうすけ）＝めくって遊ぶしかけ絵本。さまざまな色や形の食べ物に動物が隠れています。▽かぜ　びゅんびゅん（新井洋行）＝やさしい風、つよい風。いろんな風を感じてみよう。▽ふたごのしろくま　くるくるぱっちんのまき（あべ弘士）＝ふたごのしろくまが生まれてはじめて出会ったくるくるぱっちんってなあに？

新着本の紹介（香北分館）

〔大人向け〕▽ロスジェネの逆襲（池井戸潤）▽川の光外伝（松浦寿輝）▽なるほど！赤ちゃん学（玉川大学赤ちゃんラボ編）

〔子ども向け〕▽介助犬を育てる少女たち（大塚敦子）▽旅する蝶（新宮晋）▽日本のエネルギー、これからどうすればいいの？（小出裕章）

おすすめの1冊

「おおはくちょうのそら」（絵と文：手島圭三郎）

春の訪れとともに、北の国へ飛び立って行く大白鳥たち。ところが子どもが重い病気で飛び立てない6羽の家族がいます。ある朝、お父さんはついに旅立つことを決めました。大白鳥の家族は、悲しい声で鳴きかわし別れを惜しんで、病気の子を残し飛び立つのです。山かげに向かって悲しい声で鳴いていると、突然家族が戻ってきました。その晩、病気の白鳥は、死んでしまうのです。切なくも悲しいお話です。版画もすばらしい作品です。　菜美さん（土佐山田町）

吉井勇記念館だより

秋の展示のお知らせ

吉井勇記念館では、季節の展示『秋』を開催いたします。

秋の季節感あふれる作品を展示しています。ぜひご来館ください。

【期間】9月5日（水）～12月3日（月）
【問い合わせ先】市立吉井勇記念館☎58・2220

吉井勇作品紹介

ただひとり湯河原に来てすでに亡き
　独歩を思ふ秋のゆふぐれ

湯河原＝現在の神奈川県湯河原町。湯河原温泉で有名な温泉町としてよく知られ、古くから文豪・画家など多くの作家がしばらく滞在し、創作の筆を執った。

獨歩＝明治時代の文学者、国木田独歩のこと。明治34年（1901）に療養のため湯河原に滞在し、翌年、小説『湯河原より』を発表している。

〔解説〕

勇は、独歩の『湯河原より』を読んで湯河原を知ったが、実際に訪れたのは、独歩の死後数年経ってからである。小説に描かれていた当時のままの湯河原の景色を眺めながら、今は亡き作者を思ったときの無常感が感じられる一首である。

▲湯河原を象徴する万葉公園

香美市文芸　風の流れ

【短歌】　岡崎　桜雲　選

同伴のありて許されし二日旅瀬戸の礁に波せめぐなり　大岸由起子

年の差にこだわり持たねど身を寄せる君の黒髪ほのかに匂う　小松　隆之

その昔の高知勤務を懐しむ記者は香美郡を覚えていたり　森本　幸美

NHKにて昔演奏せしといふ夫が伴奏入りで吹くハーモニカ　小原　子川

ひまあれば田道ながむるあの道を通れば我が家に帰れるものを　門脇　千代

大太鼓打つレク楽し好日館指導者の笑顔に励まされつつ　鍵山　春子

百歳の近づく吾は体力の弱れど子等に支へられ生く　西尾　玉喜

幾度も限界ありしを思いつつまた繰り返す歌の投稿　公文多賀子

原発の闇は暴けるか学者らの耐震基準また曲げられて　法光院俊子

水恋鳥目覚ましにして夜を明かし田植えしつつ聞くウグイス・郭公　楮佐古きよ

人讃う寛き思いにならばやと願えば吾の心浄まる　岡田美代子

不自由なく吾を育ててくれし祖母敗戦の世に逝かしめし悔　門田　喜美

月の精宿りて咲きぬ天涯の花と呼ばるるキレンゲショウマ　山崎　貴子

石仏お顔それぞれ異なりて木陰に御座しほほえみ給う　高野　和一

ネムの花色美しと眺めつつ大豆蒔きおり梅雨も上がりて　小松　敏子

ハマゴウの花の頃やと七月の潮打ち砕く砂原に入る　坂上のぶ子

シャッターの開くを待ちてエサ運ぶツバメの二番子今日は巣立つ日　小野寺朱実

わが家に初めてつばめ巣を作り四羽が飛び立つ幸先は良し　大石　綏子

わが短歌文学館に展示さる二度となきことと拍手して見る　門田　明子

農のうた佳きを詠みゐたる友なりき又の世にても草引き在さむ　公文　正子

手遊びの立体折紙ならべたり我もわれもと奪はれゆきぬ　小松　禮子

年を踏み吾の生き様かへりみる不具合持つも可しとなさむか　武内　弘子

病院に検査待ちつつ「腹減つた」息子にメールしぬ「我慢」と戻る　竹村　咲子

ぬるい風呂のような夕暮れがやってきた草引きそろそろ仕舞いにしよう　高橋　章

歌会にいつも並びゐし友逝きぬ人の生命ははかなきものよ　林田　幸子

柿の木に麦藁帽子かけ忘れ朝まで濡らす「ごめんごめんよ」　松中　賀代

轟けば腹を押さへる女孫に苦笑つひ出る園への道に　古川　安子

外濠を次々埋めし如くにも畳の部屋はフローリングに　韮生　灯

政治論テレビを見つつ喋り合う心安らぐ二人の会話　谷内　務

せめぎあい何時まで続く民のためと口だけ叫んで行ないはがたし　公文　千恵

うす紅をひき覗きみる手鏡に「さあ」と声かけ今日の始まる　吉本　悦子

朝まだき冷たき庭に降り立てば不意に間近くうぐいすの声　山崎　緑

朝々にドリンク飲みて清々し心いやすや身体いやすや　竹村　稔美

茄子トマトピーマン胡瓜良くそだつトマト甘いと子にもすすめて　横田直加子

水無月のハンドバックに確認す眼鏡と扇子と小さきルーペ　大石紗智子

花さかる山を前方にのぼる村澄み渡るあさの光すがしも　小松もとみ

降り止みに手折りし水仙三十本ガラス戸たたく風雨は止まず　古谷　由美

春大根収穫いそしむ二人にて貝掘る契りも過ぎてしまへり　林　敏子

思い深く磯ひよの声をきく朝犬居りし日に心かえりゆく　佐々木真里

雲の影次々砂丘を過ぎ行きて吾もその中潮の香のして　都築　初代

独り言リアルに語る老母おり中待合の眼科の椅子に　伊藤　清子

つゆ晴れに雪照る杓子岳小蓮華山白馬岳は雲に隠るる　佐竹　玲子

真夜中のシャルウイダンスに励まさるスーダンに向かう飛行機の中　宮地　亀好

一本のぼたん桜は花多し気の合う仲間で遊山たのしむ　森本眞理子

孤立せし十二人の人等つつがなく復旧なりしと豪雨禍の道　岡崎　桜雲

※掲載を希望される方は、掲載月の前月1日までに、総務課内広報委員会事務局へご応募ください。

【投稿先】香美市役所総務課内広報委員会事務局「俳句・短歌」係
〒782－8501（住所記載不要）FAX53－5958